

運動とままならなさに見る熟達と環世界の変容 —アニメーターの一人称研究—

館野 奏平

「絵が描ける/描けないとはどういうことだろうか」「誰かが何かをできる/できないことを分けているものは一体なんだろうか」本研究ではアニメーション作画をモデルに、個人の熟達プロセスと本人が知覚/行為する「環世界」の変遷を記録・考察する。芸術/学習領域で行われる熟達プロセスについて、先行研究ではこれまで素人と熟達者の比較分析、制作プロセスからの分析、熟達者へのインタビュー調査を用いた分析などが行われてきたが、習熟者という途中段階への着目、一人称研究手法を用いたメタ認知による「主観」への注目、また漸進的かつ長期的な、よりマクロな背景レベルにわたって熟達プロセスにアプローチする研究は少ない。そこで本研究では一人称研究手法を通じて制作/熟達/環世界の変遷を記録し、「実践知」の抽出、また現象学や生態心理学的視点から自身の暗黙知の構造を考察する。

本研究では一人称研究アプローチを採用し、からだメタ認知記述とその分析を行った。からだメタ認知記述では2023年5月から12月の実践期間中に制作された1日平均10枚前後のスケッチなどの制作物から、制作中の思考/気づき、制作外での思考、知覚/行為の変化を記述した。また、それらに加えて現象学や生態心理学の知見を参考に、自身の環世界もとい暗黙知の構造の考察と描写を試みた。

考察では、メタ認知記述によって抽出された「運動」と「ままならなさ」という個人的なキーワードから、「運動」をひとつの環世界の構成単位として、熟達に付随する「型」や癖を「生物」として見なすこと、「冗長性」「ヴァルネラビリティ」「オートポイエーシス」「ブリコラージュ」を特徴的な入れ子の構造として、主体/環境、知覚/行為の融解と混乱を描写することを目指した。熟達というプロセスが持つ普遍的な振る舞いが、制作や基本的な動作の習得といったミクロな背景レベルに現れるだけではなく、主体の意識、過去/現在/未来といった「総体」、さらにアニミズム的な、主体を超えた共同体/歴史/環境世界にも現れる、入れ子の共通する身振りとして見出せる可能性を「環世界の変容」として記録している。

課題として、観察、実践に伴う「眼球運動」のからだメタ認知記述の不足が挙げられる。「何を観ているか」「どこを観ているか」など対象物に関する記述は存在する一方で、「モデルを何秒観ていたか」「どのタイミングで、どのくらいの頻度で紙と対象物を交互に観ていたか」など、数値的に落とし込まないにしろ、実践的にどのような意識や体感が眼球運動に伴って生じていたかというメタ認知記述が不足していた。今後は、この原因を究明すること、眼球運動のメタ認知記述が可能であれば、より個別具体的な実践知の抽出、そして熟達を目指すことで環世界がどう変わっていくのか、引き続き探究していくことを目指す。

(指導教員 松原 正樹)